
あした天使になあれ

水澤 純

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あした天使になあれ

【Nコード】

N0601I

【作者名】

水澤 純

【あらすじ】

高橋響子はベテランナース。後輩の三枝由美の指導にあたっているが、由美はいつまで経ってもマイペース。三枝病院の院長の娘である由美は、いずれは看護部長として看護面から病院を仕切っていかなければならない。いつになったら一人前になれるのやら。先輩の響子をお手本に、成長していく由美の波乱万丈の物語。

第1話

深夜2時を少し過ぎた頃、突如響き渡たる若い女性の悲鳴。それを聞いて高橋響子は、急ぎ足で廊下を声のした方へと向かう。しんと静まり返った薄暗い廊下に、響子の足音だけが響いている。

513号室、悲鳴は確かこの部屋からだ当たりをつけてドアを開ける。そこには悲鳴の主の、半ベそをかいて途方にくれている三枝由美がいた。

「三枝さん、どうしたの？こんな夜中に大きな声を出して。患者さんがビククリするでしょう？」

「高橋さあん、だって、だって、田中さんが不潔行為を……」

見ると、田中ハツがおむつを全部開いて、自分の便を寝間着やシート、ベッド柵に塗り込んでいる。

「これじゃあどうにもならないわね。お風呂に入れるから。三枝さんは部屋とベッドを掃除してシート交換しといて」

「高橋さん一人でお風呂に入れるんですか？あたしも手伝います」

「何言ってるの？二人とも浴室に入っちゃったらナースコールが聞こえないでしょう。あなたはシート交換しながら、ナースコールに対応しなさい」

響子はいったん部屋を出ると、入浴用のストレッチャーを押してきた。

「シート外すの手伝って」

「シート交換しますよ」

「違うわよ。このまま抱きあげたら私の白衣が汚れるでしょう。シートにくるんで連れて行くから」

「あっ！そうか。さすがですね。夜勤、高橋さんと一緒に仕事をすあ」

響子は思わずため息をついた。この後輩はこの仕事のことをちゃんとわかってやっているのだろうか？いつも由美と一緒に仕事をす

るときに必ず沸き起こる疑問である。二人夜勤の相方が現場を離れば、残りの一人がフォローしなければならないのは当たり前のことである。しかし、由美は何度言ってもそれがわからないようで、響子は重い溜息をついた。

「とにかく行ってくるから。あとお願いね。わからないことがあったら一人で判断しないで聞きに来ること。わかった？」

「はい。わかりました」

一抹の不安を残しながら、ストレッチャーを押して響子は浴室へと急いだ。

響子のいる病棟の端に介助用の浴室が設けられている。ここ医心会三枝病院の5階は緩和ケア病棟になっていて、がん末期の患者が静かに穏やかに短い余生を送るための病棟になっている。そのため週2回、寝たきりや自分で思うように動けない患者さんのために、老人ホームにあるようなリフト付きの介助用の浴室を設置してあるのだ。

響子は田中ハツをシートにくるんだまま浴室へと入れた。ハツが乗せられているストレッチャーは入浴用のもので、患者さんたちはまず、その上で体を洗ってもらい、その後リフトに移されて浴槽へと入るのだ。ストレッチャーの寝台部分はスライド式になっていて、ワンタッチでリフトへとスライドさせることができる優れ物だ。最初から終わりまで、患者はただ寝ているだけで入浴できるのである。「夏でよかったわねえ田中さん。でないと風邪ひいちゃうところだよ」

ハツに話しかけながら、ビニール製のエプロンを身につけて、手際良くハツの寝間着を脱がせて、温めておいたシャワーを足元からかけていく。

「うあうあ、ああうう」

「お湯、そんな熱くないでしょう？」

声を掛けながら、石鹸で汚れたところを綺麗にあらっていくと、ハツが嬉しそうに目を細めている。

「ごめんなさいね。もつと早く気がついてたら、こんなことにならなかったのにね」

まるであやすように話しかけては、ゴシゴシとハツを洗ってやった。

田中ハツは75歳である。肺癌から脳へ転移して徐々に認知がひどくなった。今はもう話すことさえできず、赤ちゃんのように「うー」とか「あー」とかしかいえなくなってしまったのだ。今では自分の息子もその嫁も、孫たちですらわからなくなっている。

きれいに流したあと、タオルで滴を拭ってバスタオルでくるむ。

「さあ、お部屋に帰りますよ」

と声を掛けて、ストレッチャーのストッパーを外して廊下へと押して出ると、浴室の中にいるときは全く聞こえなかったナースコールが廊下に響き渡っていた。

「三枝さん何をしているのかしら？」

と呟いて、急いでハツを部屋へ連れて帰る。途中、詰所の前を通ったときに声を掛ける。

「三枝さん？」

しかし、詰所には誰の姿もない。逸る気持ちを抑えてハツをベッドに戻し、おむつをして寝間着を着せてやる。

「はい、いいですよ。ゆっくり寝ましようね」

「ああう、うあああ」

体がきれいになって気持ちがいいのか、ご機嫌だ。けれど、この分では朝まで寝ないだろうと思いつながら、響子は部屋を出て、しきりになるナースコールの主の部屋へと急いだ。

第2話

「どうしました？近藤さん？」

部屋に入りながら声を掛けると、由美が患者と格闘しているところだった。

「近藤さん、お願いですからちゃんと寝て下さい！」

止まらないナースコールは、由美が離床センサーのスイッチを切らないまま上に乗っかっているからだった。

「三枝さん、センサーのスイッチ入ったまんまよ。切らないと病棟中に響いてる」

「すみません。でも近藤さんが帰るってきかないんです！」

近藤泰司は肝臓癌の末期患者である。最近血中のアンモニア値が上がってきて、ときどき訳のわからない行動にでる。本人はそんなことは何も知らないから、不穏になるとまず看護師の言うことなど聞かない。

「困ったわね。詰所に連れて行きましょう」

響子は手早く近藤を車いすに移すと、抑制用のベルトを締めて詰所へと連れて行った。

「高橋さんて、何があっても驚かないんですね。さすがだなあ」

こんなにバタバタしているのに、由美はおっとりとして笑っている。その顔を見て響子は、将来は大物だと溜息をついた。

確かに由美は将来大物にならなければいけない。なぜなら彼女は、ここ三枝病院の院長の娘なのだ。ゆくゆくは由美が看護部長として看護面から病院を仕切っていかなければならない。当の本人はそんなことにはお構いなしのマイペースだが、かえってその方がいいのかもしれないと響子は思う。でなければまだまだ若い由美は、期待や羨望、妬みなどの重圧に耐えられないかもしれない。

由美はまだ看護短大を卒業して1年にしかない。夜勤を独り立ちしてからやっと3カ月になったばかりだ。短大では看護技術や

看護理論は学べるが、患者と接する機会はわずかしかない。身体面、精神面、社会面で抱えている問題はそれこそ十人十色、百人百色で、臨機応変に一人一人と対応していくにはそれなりの経験年数が必要なのだ。

取りあえず、近藤を詰め所まで連れてくると、響子は由美に改めて対峙する。

「三枝さん、患者さんが不穏になったからっていちいち取り乱してどうするの!」

「だってえ」

「だってじゃありません!真夜中に大声を上げたり、ナースコールを鳴らしっぱなしにしたり。ここは病院なのよ。わかってる?」

「わかってます。でも…」

「まだ慣れなくてパニックになる気持ちもわかるけど、私たちが一番にしなければならぬのは患者さんを守ること。無駄に騒いで患者さんを不安がらせてはだめなのよ」

「…すみません」

「ましてここは緩和ケア病棟なの。残り少ない時間を、できるだけ穏やかに、安楽に過ごさせてあげなければ意味がないでしょう?せっかくの眠りを看護師の叫び声で妨げられるんじゃないか、ここに入院している意味がないのよ」

響子のお説教を聞いている由美の姿が、だんだん小さくなっていくような錯覚に囚われて、響子は大きな夕メ息をついた。

「三枝さん、お願いだから、常に患者さんの立場に立って、もし自分がここに入院したらってコミュニケーションしてみてちょうだい。そうすれば少しは患者さんが何を求めているかわかるんじゃないかしら」

「はい。すみませんでした。私、業務のことばかりで、他のこと考える余裕がなくなっ…」

泣き出しそうな由美に、響子は優しく微笑みかける。由美の肩を

ポンと軽くたたくと

「みんな最初はそうなのよ。余裕なんてないし、その日その日の業務をこなすのが精いっぱいなの。でもね、どんなに余裕がなくても患者さんが何を求めているかを考える時間は必ずあるはず。難しいことを考えるんじゃないって、夜眠れないとつらいだろうとか、なんとかして痛みをとって上げることができないのかなとか、そういうことを考えないと。大学で習ったような難しい専門用語なんて、患者さんには何の役にもたたないわ」

「…高橋さん」

「はい。これでお説教は終わり。さあ、近藤さんをどうしようかな？」

と言って振り返ると、いつの間にか近藤は車いすに座ったまま、こっくりこっくり居眠りをしている。その子供のような寝顔を見て響子は「可愛いつて思ったら失礼かしら」と思って、くすりと笑いを漏らす。

「どうしたんですか？」

と由美に問われて

「寝顔が可愛いなあと思って」

と答えると、由美は信じられないというように響子を見た。

「いつか、三枝さんにもわかる 때가くるわ」

と、もう一度由美の肩をポンとたたいた。

第3話（前書き）

長い間更新できなくて申し訳ありません。
ようやく第3話です。

これからもう少し更新速度を早めていきたいと思っています。

第3話

「以上で申し送り終わります」

申し送りを終えて、響子がカウンターから離れると、師長が近づいてきて目で「ちょっと」と合図をする。頷いて後を付いていくと、師長は休憩室へと入って行った。

「お疲れ様。昨夜もけっこう大変だったわね」

と苦笑いしながら労を労ってくれる。そんな気持ちがあるのなら、毎回由美の夜勤に自分をペアにするのは止めてくれたらいいのと思うが、師長である小島はそんなことは一切お構いなしである。

「三枝さん、どう？」

と問われても答えようがない。毎回由美は同じようなことを仕出かしては響子を悩ませているのだ。

「そうですね。まだ、業務をこなすことだけで手いっぱい、他のことには気を回す余裕はないようです」

「そのようね。日勤業務を見ているもそうだから、まして夜勤で他のスタッフがいなくなると、パニックになるんじゃない？」

「ええ、そういうこともありますね」

小島が何を言いたいのかわからないので、曖昧に返事をする、小島はくすりと笑って

「あなたは優しいわね。これが他の人だったらすぐに、もう一緒に夜勤できませんということになるんだろうけど」

確かに、その気持ちはよくわかる。私だって、できれば一緒に夜勤はしたくないわよと、思っているのだ。しかし、誰かが彼女を一人前にしてやらなければならぬ。と言って必ずしも響子がしなければならないこともないけれど。

それより、夜勤明けで疲れているのだから話があるのならさっさと話して欲しいと思う。

「で、師長、何かお話があるんじゃないですか？」

と、眠い目をしょぼしょぼさせながら訊く。

「ああ、そうね。実は斎藤ナースのことなんだけど」

「斎藤さんがどうかしたんですか？」

「このところ体調が悪いようだから受診させたのよ」

「それで？」

「彼女、妊娠してるのよ」

「えっ？妊娠？」

「そうなの」

「まだ独身でしたよね？」

と訊いてみたが、今時独身で妊娠することは珍しいことではない。ただ、普段の彼女から受ける印象が、未婚の母にそぐわなかったのだ。

「で、相手は誰なんですか？」

「それがねえ、言わないのよ」

「言えない相手ってことですか？」

「それがわからないの。でね、悪いんだけどあなたから訊いてもらえないかしら？」

「げっ！また私？響子は真っ暗な淵に堕ち込んでいくような気がした。」

「あの…師長、どうして私ばかりなんですか？」

睨みつけながら訊ねる響子の視線を、いとも簡単に跳ねかえして、小島は

「だって、あなたはみんなから信頼されてるから」

と宣う。のたまう。これじゃあまるで、師長自ら「私は信頼されていないのよ」と公言しているようなものだ。響子は大きなため息をひとつとつくと

「それって、今日でなくてもいいですよね？」

と諦めモード全開で訊く。

「もちろんよ。彼女は今日遅出で昼からでないと来ないから。あなたの都合のいいときに、でも早い目に訊いてみてちょうだい」

「わかりました」

と立ち上がりかけて、ふと、気が付いてもう一度座り直す。

「斎藤さん、生むつもりなんでしょう？」

「そうらしいわね」

「たしか、山口の出身でしたよね？ご両親にはお知らせしたんですか？」

「それがねえ…」

と師長にしては珍しく難しい顔をして

「個人情報が邪魔をしてできないのよ」

と言った。

「個人情報？」

「ええ、彼女は成人しているし、ご両親に話すには本人の許可がいるのよねえ。寮に入ってくれていたら誓約書を交わすから、こちらから報告して、来ていただいてつてできるんだけど、彼女は一人暮らしでしょう」

困ったわあと続けて、わざとらしくこめかみをもむ師長を見て、仕方ないと諦めて

「一度彼女に連絡して話を聞いてみます」

と立ち上がりながら言った。

「ありがとう。助かるわ」

途端に嬉しそうに礼を言う小島に、もっとしっかりしてよと心の中で文句を言って休憩室を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0601i/>

あした天使になあれ

2010年10月10日10時21分発行